



Title	大阪の企業家と文化振興
Author(s)	作道, 洋太郎
Citation	懷徳. 1988, 57, p. 75-83
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90698">https://hdl.handle.net/11094/90698</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〔講座講演より〕

## 大阪の企業家と文化振興

作 道 洋 太 郎

### 懷徳堂の伝統

懷徳堂の精神や伝統は現代にも生きているとよく言われます。この懷徳堂記念会で毎年春秋に開催している公開講座もそのひとつでありますし、また大阪市内で催されているシンポジウムやセミナーなどで「現代の懷徳堂」というキャッチ・フレーズを使ってP・Rしている場合も聞くことがあります。

享保九年（一七二四）に「懷徳堂五同志」と言われる大坂町人たちが中心メンバーとなって創設され、初代学主の三宅石庵はじめ、その後を継いだ中井鋸庵、三宅春楼、中井竹山、中井蕉園、中井碩果、並河寒泉、中井桐園らの歴代学主や預り人たちによって創り上げてきました懷徳堂の学問は、大坂における実学の伝統を築き上

げ、懷徳堂が町人学の殿堂と言われるようになったことは周知のところであります。

この実学というのは、狭い意味での身辺実用の学という見方からだけではなく、自由討究の学問精神によって裏づけられたものであった点を見落してはならないと思います。懷徳堂では四書・五経をテキストにしながらもひろく学んで、懷疑の精神をもって自由に批判し、かつ中正を得ることを重視していました。したがって、学問としての整合性よりも、その実践性にポイントを置いており、町人向けの教養的儒学を創造したところに、懷徳堂の特質がうかがわれると思うのです。その点、江戸幕府の学問所でありました江戸湯島（はじめは上野忍ヶ岡にありました）の昌平黉しやうへいこうとは性格をいちじるしく異にしており、懷徳堂の学問は虚心坦懷で、町人教育の本旨に

そうものであります。

大坂における実学は、このような懷徳堂の学問によってその基礎が築かれたと言いうことができると思っています。明治になって、日本資本主義のパラダイム（歴史的枠組み）をつくった渋沢栄一が『論語』をバイブルとして儒教資本主義を提唱し、儒教のなかに近代企業家のエートス（経済倫理）を求めたことはよく知られていますが、その儒教資本主義のルーツは懷徳堂の学問のなかにも求められると言って差支えないと考えられます。こうした実学の精神は、これを契機として江戸期大坂町人道が確立したことによって裏づけられているものと言えましよう。

この懷徳堂は、さきに申しましたように「懷徳堂五同志」、すなわち大坂尼崎町一丁目（現在、東区今橋四丁目）の醤油醸造業者（一説によりますと、漬物商であったとも言われています）の道明寺屋吉左衛門（富永芳春）、兩替商（一説では舟板問屋）の備前屋吉兵衛（吉田可久）、貸家業の三星屋武右衛門（中村良斎）、家業は不詳の舟橋屋四郎右衛門（長崎克之）、兩替商鴻池善右衛門家三代の当主宗利の女婿にあたる鴻池屋又四郎（山中宗古）らによって設立されたのでした。これら大坂町

人たちに共通しているところは、家業の経営によって資本を蓄積するだけの単なる「自己蓄積型」のタイプの富商ではなく、資本蓄積にあわせて、企業利益の社会還元を意図していた「文化振興型」のタイプの大坂町人であったと言いうことです。

今日講話で取り上げます近現代の大坂の企業家も、そのような意味では「文化振興型」の人びとであります。そうしたところに、社会経済状況の大きな違いにもかかわらず、懷徳堂の伝統精神と近現代の企業家精神との歴史的連続性が認められるのではないかと思います。

### 近代企業家の学術文化振興

近現代の大坂における企業家の学術文化振興の活動は、宮本又次先生がさきに著わされた『大阪経済人と文化』（昭和五十八年・実教出版発行）に詳しく述べられています。この研究を参考にして、その活動状況を年表風にまとめて申し上げたいと存じます。

#### 第一表 関西企業家の文化活動

- (1) 明治十三年 五代友厚・門田三郎兵衛・伊庭貞剛ら 大阪商業講習所（現在の大阪市大）の設立。
- (2) 明治三十七年 住友春翠 大阪府立図書館（中之

島)の寄付。

- (3) 明治四十四年 岩本榮之助 大阪市中心公会堂  
(大正七年竣工)の建設基金一〇〇万円を寄付。
- (4) 大正五年 永田仁助・住友春翠・鈴木馬左也ら  
重建懷德堂(東区豊後町)の建設。
- (5) 大正五年 塩見政次 塩見理化学研究所(竣工は  
大正十四年、初代所長は府立大阪医科大学学長佐多  
愛彦)の建設基金一〇〇万円を寄付。
- (6) 大正六年 竹尾治右衛門 竹尾結核研究所(所長  
佐多愛彦)を設立。
- (7) 大正七年 山口玄洞 山口厚生病院(元中津藩大  
坂蔵屋敷所在地)の設立資金一〇〇万円を拠出(大  
正十一年竣工、その管理は府立大阪医科大学)。
- (8) 大正八年 大原孫三郎 大原社会問題研究所(天  
王寺区伶人町、現在大阪府立夕陽丘図書館)を設  
立。
- (9) 大正十年 住友春翠 慶沢園(天王寺区茶臼山  
町)を大阪市へ寄付。
- (10) 大正十四年 住友春翠 京都鹿ヶ谷の別邸内に泉  
屋博古館を建設(昭和三年竣工)。
- (11) 昭和二年 野村徳七 大阪商科大学(現大阪市

大)経済研究所設置資金一〇〇万円を大阪市へ寄付  
(昭和三年開設)。

- (12) 昭和六年・八年 山口玄洞 大阪大学に微生物病  
研究所を寄付。
- (13) 昭和九年 嘉納治兵衛 神戸市に白鶴美術館を開  
館。
- (14) 昭和十三年 伊藤忠兵衛・小倉正恆ら 大阪大学  
に産業科学研究所を設置。
- (15) 昭和二十五年 黒川幸七 芦屋市に黒川古文化研  
究所を設立(現在西宮市苦楽園三番町)。
- (16) 昭和二十六年 藤田伝三郎・平太郎(没後) 大  
阪市に藤田美術館を設立。
- (17) 昭和三十二年 小林一三(没後) 池田市に逸翁  
美術館を開館。
- (18) 昭和三十七年 鳥井信治郎(没後) 大阪大学蛋  
白質研究所に酵素研究所鳥井記念館を寄付。
- (19) 昭和三十九年 山口吉郎兵衛(没後) 芦屋市に  
滴翠美術館を開館。
- (20) 昭和四十六年 瀬川徳助 西宮市に瀬川美術館を  
設立。
- (21) 昭和四十七年 村山龍平(没後) 神戸市に香雪

### 美術館を設立。

ここに挙げました事例は、比較的よく知られているものですが、枚挙にいとまがありません。そのなかには教育研究機関をはじめ、病院・美術館・公園などがあり、非常に多彩なものがあります。大阪大学との関係から見ますと、重建懷徳堂（前記の(4)）、塩見理化学研究所（(5)）、竹尾結核研究所（(6)）、山口厚生病院（(7)）、微生物病研究所（(12)）、産業科学研究所（(14)）、蛋白質研究所鳥井記念館（(18)）などがあります。

このような大阪の企業家による公共への奉仕、学術文化への寄与には、懷徳堂の創設とその運営に見られるような、江戸時代以来の伝統的な町人文化の精神風土が見いだされるところです。今日の講話では、そのうち山口玄洞の企業者活動と、それをつらぬく企業家精神について考えてみることにしたいと思います。

尾道出身の船場商人であった山口玄洞は、大阪大学の微生物病研究所の創設や、医学部附属病院の建設などに重要な役割を果たしましたが、とくに懷徳堂のメンバーであったと言うわけではありません。しかし、山口玄洞の活力に溢れた企業者活動や、社会への奉仕活動に全力を注いだ清らかな生涯には、懷徳堂の精神や伝統が生か

されていると思うのです。こうした大阪独特の企業文化のなかに、懷徳堂学の今日的意味がうかがえるのではないかと考えております。

### 山口玄洞の企業者活動

山口玄洞は、幕末期の文久三年（一八六三）、尾道の医師の子として生まれましたが、少年期に父を失い、大阪の商家に丁稚奉公をして、のちに独立開業に踏み切り、船場の洋反物商（唐物屋）から大型の織維商社へと成長し、海外市場の開拓にもつとめ、大きな成功を収めました。多額納税者で貴族院議員にもなりましたが、五十六歳のときには引退し、仏教に帰依して社会奉仕一筋の道歩んだのでありました。その稀有な生涯には、懷徳堂学が現代に語りかけている課題とも、なにか共通したところがあるように思われてなりません。

山口玄洞につきましては、宮本又次・安岡重明の両氏が編纂された『山口玄八十年史』（昭和四十年・株式会社山口玄発行）や、尾道市立美術館・日本経済新聞社編集の『日本名宝の旅・尾道——山口玄洞ゆかりの寺院と茶道名宝展——』（昭和六十三年・尾道市立美術館発行）があります。この二つの文献によりながら、玄洞の

主要な活動を年表にまとめてみました。

## 第二表 山口玄洞の年譜

- (1) 文久三年 尾道の医師山口寿安の長男として生まれる（幼名謙一郎）。
- (2) 明治四年 岩城島（愛媛県）の漢学塾「知新学校」で学ぶ。
- (3) 明治十年 父の急死により帰省、荒物の行商を始める。
- (4) 明治十一年 大阪の洋反物商土居善に丁稚奉公（通称清助）。
- (5) 明治十五年 大阪伏見町で独立開業。父の商標を定める。
- (6) 大正元年 大阪備後町に店舗を新築。
- (7) 大正七年 株式会社組織変更。玄洞引退（五十歳）。山口厚生病院（大阪堂島）を寄付（大正十一年竣工）。
- (8) 大正十一年 尾道市の上水道敷設資金として一〇三万円余を寄付。
- (9) 大正十三年 京都寺町に山口仏教会館を建設（現在京都市歴史資料館）。
- (10) 昭和三年 京都市伏見区の醍醐寺の大講堂をはじめ

め弁天堂・不動堂・鐘楼・阿闍梨寮・総門・学寮・地藏堂・伝法院本館など九棟を建立。

- (11) 昭和八年（同十年）京都市右京区高雄の神護寺の金堂・多宝塔・和氣清麿廟・茶室などを新築、毘沙門堂その他を修築。

- (12) 昭和十二年 比叡山の延暦寺に阿弥陀堂を新築（その竣工を見ないで玄洞他界）。

- (13) 昭和十二年 玄洞死去（一月九日、七十五歳）。

この年譜では、山口玄洞の企業者活動よりも学術文化の振興や公共事業への社会奉仕が中心となりましたが、<sup>(1)</sup>山口玄の経営史的な側面については、さきに申しました社史『山口玄八十年史』を参考にしたいだけだと思います。ここで山口玄洞の生い立ちや、旺盛な企業家精神のルーツについて二、三申し述べたいと思います。

玄洞は九歳のとき、父の配慮で尾道から離れた愛媛県岩城島の漢学塾（前記の(2)）で勉学の機会を得たのでした。そのとき父寿安は玄洞に「要用書」（明治八年）と題した日常生活の心得について書簡を送り、父親としての深い慈愛を示しているのは非常に興味深いものがあります。次に、その要点を二つのグループにわけて紹介し

たいと思います（その全文は『山口玄八十年史』に収録されています）。

### 第三表 父寿安の処世訓

#### (一) 生活規範について

- (1) 朝夕神様を拝むこと。
- (2) 御守を粗末にしないように大切にすること。
- (3) 友達とは親しくし、喧嘩口論などはしないようにすること。

(4) 乱暴な遊びをしてはならないこと。

(5) 高い所には登るような危険なことはしないこと。

(6) 手紙はきちんと二つ折りにすること。

(7) 行水をした後で浴衣か白帷子を着ること。

(8) 歯磨きを送るから朝夕必ず歯を磨くこと。

(9) 汚れた着物は船便で送り返すようにすること。

(10) 茶枕を送るから、余り高過ぎぬようにして使うこと。

#### (二) 食事上の注意事項

(1) 食い合わせにならぬように注意すること。例えば、蛸と梅、猪肉と生姜、豌豆と南京瓜などは注意されたい。

(2) 魚の骨をたてぬよう注意すること。若し骨がた

った時には、茶碗の縁に墨で「生鬼同根万物一躰」と書き、アビラウンケンソワカラと十遍唱

え、水を入れて吞むこと。

(3) 西瓜・トロコテン・甘酒の類は適量を心掛け、

食べ過ぎとならぬようにすること。

(4) 夏の飯は腐敗しやすいから、酢を入れて炊くこと。

このような父から子に書き送った処世訓を読んでいますと、ベストセラーの『ビジネスマンの父より息子への30通の手紙』（キングスレイ・ウォード著、城山三郎訳）が連想されて来ます。後継者養成や人材育成のコツが示されているからなのでしょう。

父の死後、尾道で荒物の行商や、大阪本町での丁稚奉公をしてから独立開業に踏み切ったのですが(3)・(4)・

(5)、その間「船場学校」とも言うべき行動的体験学の本場の大阪で得難い経験を積み重ねた状況が、前記の『八十年史』のなかで詳しく述べられています。

大正七年一月、個人商店から株式会社社口商店へと改組されました(7)。資本金は一〇〇万円でした。その機会に、玄洞は引退し、多年にわたって育成してきた幹

部社員にすべての権限を委譲しましたが、やはり相談役程度の役割はその後も果たしていたようです。玄洞の引退は五十六歳のときでありましたが、健康がすぐれないことや、新宅山口嘉蔵の事業上の失敗も引き金になったと、さきの『八十年史』には述べています。

玄洞の引退後、第一次大戦の終結に伴う景気の変動が激しく、大正九年には戦後恐慌が発生しましたが、山口商店の経営は順調に伸び、大正八、九年の頃には資本金の二倍半にも及ぶ二五〇万円の純利益を計上しました。

驚くべき成長と言えましょう。そのとき、山口商店の重役陣は増資を計画していましたが、玄洞は堅実経営の基調を説いてカミナリを落としました。その後、不況局面に突入し、業界は急速に窮状におちいりましたが、山口商店はビクともせず、玄洞のカリスマ性が發揮されたようです。こうしたところから見ても、引退後においても要所はキチンと押えていたように思います。それから二、三年後の大正十一年には二五〇万円の増資しております。

このように、不況下でも堅実経営を続け、世間から注目を浴びましたのは、手形を用いないで現金取引を主体としており、思惑買いを戒め、他方では海外市場を開拓

して、積極的に繊維製品の輸出に力を注ぎ、また大阪川口の華僑全員を京都嵐山に招待して同業者を驚かせるなど、華々しい企業者活動を展開したからでありました。山口商店の社員は月給もボーナスも京阪神地方で最高クラスに達しており、この方面でも注目されていたと言えます。

玄洞は、このようにして蓄積された企業利益を、さきに年譜で示しましたように、各種の公共事業のために寄付をしています。故郷の尾道では良質の水が乏しく、上水道を必要としましたとき、総工費一四八万円余のうち国庫補助・県補助などを控除した一〇三万円をポンと寄付しております(8)。また玄洞の初発心の土地京都に山口仏教会館を建て(9)、玄洞に禅的陶酔の境地を悟らせた方広寺派管長間宮英宗禅師を館長に迎えたのでした。

さらに玄洞は、さきに述べましたように、山口厚生病院の建設や、大阪大学微生物病研究所の創設にも力を入れ、医療機関や教育研究施設の拡充・発展に尽力しています。

引退後、信仰の生活に入っていました玄洞は、醍醐寺(10)、神護寺(11)、延暦寺(12)をはじめ、各地の寺



院建立に巨費を投じたのでした。玄洞による寺院の堂塔の建立だけでも一〇〇棟を超え、その寄付総額は五百数十万円にも達していたと言われています。それは現在で言えば一〇〇億円をはるかに超える金額でありました。

玄洞は豪福にありがちの守銭奴ではなくて、「捨銭翁」だったと言われるのも、そのためであります。

玄洞が寺院建立に際して、三つの条件があったと言われます（『山口玄八十年史』による）。その第一は寺院の由緒が正しいこと、第二は景勝の地にあること、第三は住職の人柄がすぐれていること、でありました。こうしたところにも、船場商人としての鋭い着眼点が見られるように思います。

玄洞による社会事業や学術文化振興の活動をつらぬくものは、「無功德」の精神であったと言われます。これは陰徳をつむと言うことであり、臨済宗のバイブルとも見られる「碧巖録」の精神でもあります。

玄洞が尾道市に上水道敷設資金を寄付したとき、尾道市では謝意を表わすために銅像を建てたいとか、男爵の爵位を申請したいという運動を起こそうとしました。その動きを聞いた玄洞は「自分としては代償を受けるためにしたのではない。無功德の精神だから。それなら尾道

市民各自が祖先に感謝し、現在未来の幸福を祈念するた  
め念仏を三遍唱えて頂けば満足である」（前記の『八十年史』による）と言って、その申し出をキッパリと断わ  
ったと伝えられております。この陰徳をつむと言う考え  
方は、江戸時代以来大坂町人の伝統とするところであり  
まして、こうしたところにも江戸時代と近現代との歴史  
的連続性が見られるように思います。

### 懷徳堂と現代

民俗学に、「ハレ」（晴）と「ケ」（藝）という生活  
律があります。ヨソイキとフダン着、稲作文化と非稲作  
文化、宮廷儀礼と民間儀礼など、日本人の生活のなかに  
は独特の循環構造があることが知られています。

こうした見方から考えますと、江戸期商人が家業経営  
によって商業利潤を蓄積して行く日常活動は「ケ」の文  
化を表わすものであり、「懷徳堂五同志」が協力して学  
問所の懷徳堂を建設したことは「ハレ」の文化だと言う  
ことができるかと思うのです。

また山口玄洞の企業者活動についても、同じように日  
常的なビジネス活動としての「ケ」の文化と、教育研究  
機関・病院・寺院建立に見られる「ハレ」の文化があっ

たのであらうと考えられます。

そのような「ハレ」と「ケ」を結ぶものは、懷徳堂五同志や山口玄洞の活力溢れる企業家精神ではないかと思えます。企業家とは要するにシムムペーターのいう革新者（イノベーター）であり、新しい秩序を創り上げる創造的破壊の担い手であると言えましようが、そうした企業家のエートス（経済倫理）に「ハレ」と「ケ」の橋渡しをおこなう中核的なスピリットが見られるのではなからうかと考えております。

懷徳堂学からは儒教資本主義のルーツが感じ取られますし、また山口玄洞の行動原理のなかには仏教資本主義とも言うべきものがあつたように思ふのです。日本資本主義のパラダイムには、そうした儒教資本主義や仏教資本主義の価値体系が見られるのではないでしうか。

現在、ボーダーレス・エコノミーの時代を迎え、国際化・自由化が急速に進むなかで、日本の政治・経済・文化は大きな転換を余儀なくされています。それはパラダイムの再編成であり、アイデンティティの再確認が迫られていると言うことだと思ふのです。

このような時、懷徳堂学が現代に残している歴史の教訓や、山口玄洞の清純な生涯が現代に何を語りかけてい

るかを、もう一度考え直してみることが私たちに与えられている課題だと思ひます。大阪の文化振興や、大阪の活性化を語る場合、こうした歴史から何かを学び取りたいと考えています。

マックス・ウェーバーは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（一九〇四—一九〇五年）のなかで、資本主義経済を構成する原理として、(一) 道德的標準 (二) 生産する財の「全体」に対する重要性 (三) 私経済的収益性——以上の三点を指摘し、一番最初に収益性ではなくてモラルを挙げているのです。このようなウェーバーの西欧資本主義におけるニュリタンの合理主義を念頭に置いて、森嶋通夫氏は『なぜ日本は「成功」したか？——先進技術と日本的性情——』（昭和五十九年・TBSブリタニカ発行）において、日本独自の儒教資本主義の成立過程とその本質を説明することに力を注いでいるのは大へん興味深く思ひます。

懷徳堂に見られる儒教文化や山口玄洞の企業者活動を裏づけていた仏教文化には、ウェーバーのいう資本主義精神に対比されるような日本人のエートスや、現代日本経済の原像が秘められているように考えられるのです。（昭和六十三年五月二十三日）（大阪大学名誉教授・近畿大学教授）